
走る男(1 4 禁)

ごはんライス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

走る男（14禁）

【Nコード】

N8526H

【作者名】

ごはんライス

【あらすじ】

オレは走らなくてはいけない。理由などない。ゴールなどない。これも世のためオレのため。走るのだ。うおーーーーーっ！！！（筒井康隆師匠の短編「走る男」と、ガキの使い「笑ってはいけない24時」シリーズを準拠枠としています）なお、不適切な表現が含まれるため、14歳未満の子は閲覧禁止とさせていただきます。なんで子供に敬語やねん。

オレは走らなくてはいけない。理由などない。走らねばならないのだ。ゴールなんてない。そんなものあるわけない。だって、オレが走る目的は走ることだから、ゴールなんてないのだ。

「はアはアはア」

ノドが渴いた。オレは自販機を探す。「あ。あった」
ポケットから財布を探す。む。ない。落としたか。

オレはやむをえず、コンビニに入った。

「一個、もらつてくね」

「たけしさん！がんばってください！」
店員と握手してから店を出る。

みんなの期待に応えねばならない。オレは走らねばならない。
ああ。それにしても疲れた。まったく何てことだ。今、気づいた
のだが、これ給料なしでやってる。

なぜだ。なぜ給料が出ないのだ！こんなに苦しいのに！

そう考えるとだんだんペースが落ちてきた。

あ。止まっちゃった。

ででーーーーーん。

「たけし、アウト」

どこからともなく、マッチョな黒人が二人現れた。なぜかブリー
フいっちょうだ。

一人がオレの腕をつかみ、一人がオレの尻に両方の人差し指で浣
腸した。

「うぎゃあああああああああ」

黒人二人はどっかに去っていった。

「しくしく」

オレは悲しい。アスファルトに女座りになり、しくしく泣いてい

ると、前から小学生たちがやってきた。

「わアたけしさんだ」

「ほんとだ。ホンモノのたけしさんだア」

ちびっこたちがオレのまわりを囲む。

「たけしさん、今日はどこを走ったんですか」

「うん。滋賀県から京都府まで」

「わアすごい！」

ちびっこたちがサインちょうだいサインちょうだいというのでTシャツとかに書いてあげた。

「ありがとう！」

「ふふふ。君たち、走るの好きかい？」

「うん！ 嫌い！」

オレは元気が出てきた。あのちびっこたちのためにもオレは走らねば。

「はアはア」

沿道の人たちが旗をふる。

「たけしさん。ファイトお」

「がんばれ！がんばれ！」

「はアはアはア」

夜となり、オレは眠くなってきた。これはいかんと思い、覚せい（プーーーーっ）い剤を吸引した。

一気にハイテンションとなった。

「うおおおおおおおおお」

警官に捕まった。

「ちよつと。おまわりさん。オレ、走らないといけないんだよ」

「ダメだダメだ。こんな夜中に怪しい」

「そんなア」

しかも、覚せい（プーーーーっ！プーーーーっ！）剤を持ってるのが見つかった。

「ふん。署まで来るんだ」

「やだやだやだ。オレは走るんだ。走るんだい！」
沿道の人がオレをじっと見つめてる。

「ああん！みんな！助けて！」

みんな、足早に去っていった。

「ちきしょう！！！」

オレはむかついてきて、警官の股間を蹴り上げた。

「うひゃあ！」

「やまもっさん！」

オレは逃げた。

「はアはアはア」

これはいかん。警官にバカなことされてたらお腹がすいてきた。
どうしよう。

オレは、畑にすいかがあつたので、一個割った。

「しゃりしゃり。んまい」

元気が出てきた。

「ようし。走るぞ！」

オレはすいかの皮を放り投げた。

それがダンプカーの窓に叩きつけられた。

「うわああああああああ」

視界が狭くなり、ダンプカーは右にそれた。前から走ってきたトラックと衝突した。

「うわああああああああ」

うーうー。うーうー。

えらい騒ぎになっている。なんてことだ。

しかし、オレは走らねばならぬのだ。気にはおれない。

「はアはアはアはア」

あきらめちゃいかなのだ。あきらめなければ夢はかなうのだ。
かなうのだ！

オレは、しかし、またやばいことになってきた。

風俗街に入ってしまったのだ。

「お兄さん。遊んでかなーい？」

「一万円でいいよ！かわいい子そろってるよ！」

やばい。やばい。やばい。勃起^{びつ}してきた。

ちきしょう。走りにくい。ごつつ走りにくい。

オレはこれじゃあ走ってられないと思って一発抜いてから行くことにした。

ヘルスの前で立ち止まった。

でー！ー！ー！ん。

「たけし、アウト」

うわ。まさか。また、黒人が。

と思ったら、ガングロの女子が二人きた。

一人がオレの腕をつかみ、一人がオレのズボンを下ろした。

しばらくお待ちください。

オレは元気になった。すっきりした。ようし。走るぞ走るぞ。

ああ。だんだん走るのが愉しくなってきた。ハイになってきた。流れる景色が心地よい。

「うはははははは。ニューヨークまで行けそうな気がするぜ」

オレは調子に乗っていた。

とその時。

三年前に出発して以来家で待っていたはずの妻が、他の男と腕を組んで歩いてるではないか！

「あ。ロリ華。なんだその男は！」

「げ。たけし」

「うぬぬぬぬ。ちきしょう。浮気だな！」

ロリ華はわめいた。「あんたが帰ってこないのが悪いんでしょう！」

「ちきしょう！ちきしょう！」

オレは地団太を踏んだ。

浮気相手が話に割ってくる。

「まアまアたけしさん。落ち着いて」

「これが落ち着いてられるか！オレが真面目に走ってる間にこいつは！こいつは！」

ロリ華は泣き出した。

「だってあたしさびしかったんだよ。たけしが出発してからあたし毎日泣いて暮らしてたんだよ！」

「ロリ華ア」

オレもしんみりしてきた。

三人で暗く、アスファルトに立ち尽くした。

ででー！ー！ーん。

「三人ともアウト」

「ええっ」

マッチョな黒人三人が電柱の影から飛び出した。

「うぎゃあああああああ」

三人とも浣腸された。

「うう。痛い」

「痔が」

オレはふらふらしながら立ち上がった。

「こんなバカなことしとれん！オレは走らないと！！！」

「ああん。たけし。待って！」

走る。走る。オレは走る。

ゴールなんてない。目的が走ることなんだからあるわけがない。ただ、ただひたすらオレは走るのだ。

理由は太陽が知ってるさ。

「はアはアはア。はアはアはア。コンビニで味噌汁とおにぎりをもらってこよう」

煙草屋の角を曲がれば、朝日がオレに向かって近づいてくる。

お
し
ま
い

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8526h/>

走る男(14禁)

2010年10月8日14時40分発行